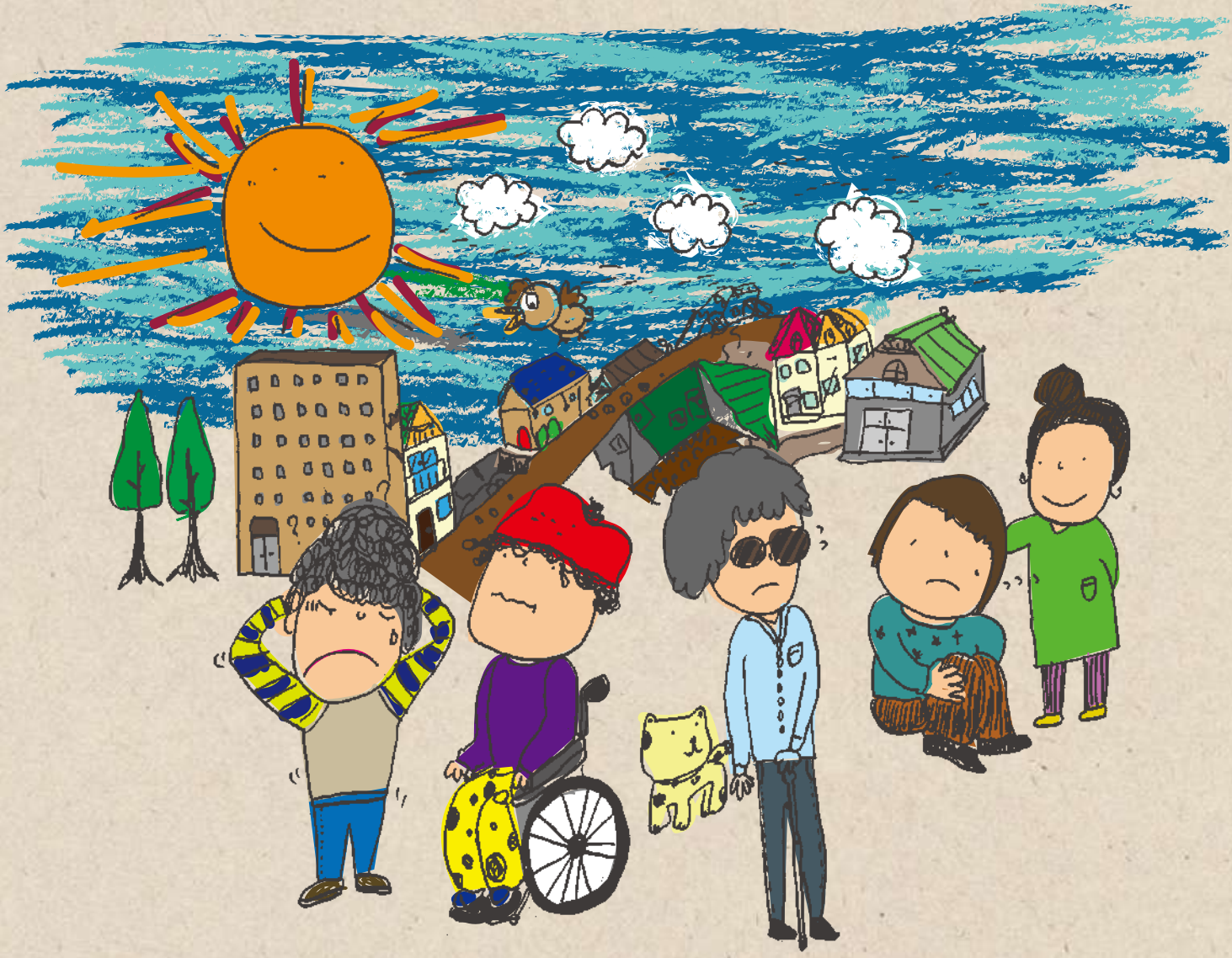
障害者
難病者
編

災害時のスペシャルニーズ支援ハンドブック



災害時に孤立する人を生み出さないために

社会福祉法人　大阪ボランティア協会

いつでも、どこでも、だれとでも 「支える」から「支え合う」へ

近年では、大きな災害時には災害ボランティアセンターが立ち上がり、多くのボランティアが活動するようになりました。しかし、被災した市民からの生活支援ニーズが多数寄せられ、またボランティア活動希望者が殺到し、障害者や難病者など災害時に特別な配慮（スペシャルニーズ）を必要とする人への対応が遅れがちになります。行政機関自体も被災する中で業務に追われ、十分な支援は期待できません。

一方、普段から障害者・難病者支援に取り組む団体や施設において、避難訓練など命を守る準備は進んでいます。しかし、団体自身が被災し出勤できない職員も多い中で、どのようにして早急に態勢を日常に戻すかについては、あまり準備が進んでいないのが現状です。また普段、サービス利用をしていない障害者や難病者が取り残される不安もあります。

本ハンドブックは、平時から障害者・難病者支援に取り組む団体が、ボランティアや地域から協助・共助を受け入れながら、また、自助で団体運営を立て直す際の参考になることを願って作成しました。インフォーマル支援に焦点をあてて、そのあり方や具体的ノウハウをまとめています。行政などの公助や職務として取り組まれるフォーマル支援については、他の資料などをご参照ください。

なお、本書は 2016 ～ 2018 年度に実施した「災害時のスペシャルニーズ支援事業」の成果をまとめたものです。事業実施にあたっては、大阪府福祉基金地域福祉振興助成金事業として 3 年間採択していただきました。また多くの方に研究会やアンケート調査などにご協力いただき、知見を提供していただきました。心よりお礼申し上げます。

目次

障害者や難病者、および支援者の災害時の困りごとや希望、願い・・・・・3
熊本地震の福祉作業所に学ぶ災害時アクションのポイント・・・・・・・・6
専門家でなくても、お願いできることイロイロ・・8
災害時につながっておきたい人々・・・・・・・・10
周りの人の力を借りる・・・・・・・・・・・・・・12
【大阪発】防災・減災のために、日常からの取り組み・・・・・・・・・・・14

団体内部の会議や勉強会で

複数団体の関係者が集まる研修の場で

本冊子の使い方

まずは、ざっと目を通して概要をご確認ください。もし、役立ちそうだと感じられましたら、本ハンドブックを片手に「もし災害があったらどうする？」「事前に準備しておくべきことは？」などを、各団体で話し合うことで、災害時の大きな支えにしていただければ幸いです。

災害時には、どのようなことが起こるでしょうか？　障害や難病の当事者だけでなく、支援者にもさまざまな「困りごと」が発生します。特に大規模災害では、避難所生活も想定して、どんな困りごとがあるかイメージしてみましょう。

心の困りごとに対する希望

困りごとがあるけど、遠慮して言えない。誰か聴いてほしい。

友達や気心の知れた人に会いたい。

（避難所の共同生活などで）自分の意見を聴いてほしい。話し合って進める主体になりたい。

メディアや支援者の対応に疲れた。そっとしておいてほしい。

自分の役割がほしい。支えられるだけでなく、支え合いたい。

たとえ解決できなくても、自分の苦しみをわかってもらいたい。弱音を吐きたい。

場の困りごとに対する希望

子どもがどうしても大声を出してしまう。大声を出してもいい場所がほしい。

ずっと車イスに乗ってるのは大変だし避難所でトイレに行くと周りに迷惑がかかる。トイレの近くで横になって寝れる場がほしい。

聴覚過敏で人混みが苦手。静かな場所がほしい。

急に周囲の人や環境になじむのが難しい。なじめなくても安心できる場がほしい。

支援者が悩みを共有したり、学べる場がほしい。

※本事業障害者・難病者支援研究会「災害時の困りごとに対する希望とその解決策」ワークショップの意見を抜粋しました。

人の困りごとに対する希望

障害特性を理解したうえで、
気づかいや手伝いをしてほしい。

トイレや食事が１人ではできない。
誰か介助してほしい。

周囲を片付けるなど、ちょっとしたことを頼める人が近くにいてほしい。

支援者であっても家族が気になる。勤務はするけど早く帰りたい。

障害や難病当事者の家族が疲れ果ててしまう。
家族を支える人がほしい。

話し合いの仲介役や
促進役になれる人、
ニーズを集めて伝える人が
いてほしい。

モノ・カネの困りごとに対する希望

塩分を控えないといけない。
減塩食がほしい。

通常のトイレは使えない。
自分に合ったトイレがほしい。

休息のために被災地外へ
旅行するお金がほしい。

常用している薬を手に入れたい。

タバコを吸わないと幻聴が聞こえてくる。なんとかタバコと火を手に入れたい。

病気や障害によって、公共料金が無料になったりならなかったりする。嫉妬やもめごとの原因にもなるので、そうならないルールや仕組みがほしい。

情報の困りごとに対する希望

支援者が情報交換する
仕組みがほしい。

炊き出しや支援物資配布などの情報が、インターネットや掲示板で発信されているが、視覚障害があるのでわからない。音声で伝えてほしい。

12 時間ぐらいなら
１人で過ごせる。
しばらく待てば支援者が
来てくれるかどうか知りたい。

災害の概要を知りたい。
どこでどんな被害があるのか、
自宅にいて火災や倒壊に巻き
込まれないかなどを知りたい。

知り合いや家族、
近所の人がどこに
いるか知りたい。会いたい。

コラム　家族と近所の人々に支えられて停電を乗り切った

人工呼吸器を装着している ALS 患者の A さんは、自宅で阪神・淡路大震災に被災しました。停電によりライフラインがストップする中、呼吸器のバッテリーの予備がなく、関連会社に連絡はつきましたが取り寄せるのに時間がかかるとのことでした。やむなく手動式蘇生パックを使用して換気を行うことになりました。いつもは夫婦二人暮らしですが、不幸中の幸いでたまたま娘がいたため、二人交代で 36 時間手動で作動させ続けることができました。

また、近所の方が家族の状況を理解し、室内を片付けるなど生活環境を整える援助をしたケースもありました。あるいは電力会社へも連絡し特別に早く送電を再開できたケースもありました。

災害の規模の大きさ、時間の経過とともに、人工呼吸器を装着した療養者家族の支援の程度は変化します。初期には、家族、近隣の人々だけが支援者となりえます。普段から近所の人々との交流をはかり療養者の状況を理解して、支援してくれるネットワークを作っておくことが大切です。

厚生省特定疾患　特定疾患患者の生活の質（QOL）の向上に関する研究班「人工呼吸器装着車の訪問看護研究」分科会　分科会会長　川村佐和子編集「人工呼吸器を装着している ALS 療法者の訪問看護ガイドライン」平成 12 年 3 月発行より一部編集の上引用しました。

障害者支援 NPO にしはらたんぽぽハウス

事例紹介

熊本県阿蘇郡西原村にて、就労継続支援Ｂ型事業所「ナチュラルファームいまここ」（通所者15人）、および地域活動支援センター「にしはらたんぽぽハウス」（通所者５人）を運営している。2008年８月に特定非営利活動法人の認証を受けて、現在は職員５人、ボランティア５人が活躍している。

発災前（設立）

団体設立のきっかけは、西原村社会福祉協議会を中心として2004年に実施されたワークショップ「バリアのない西原村づくり」でした。障害当事者、家族、行政、小中学校の教員、保育所、保健師、民生委員など約50人が話し合い、2005年に小規模作業所としてスタートしました。

ポイント１　頼りになるのは日常のつながり

災害時に支えてもらったり、地域の当事者を支援するためには、日常からのつながりが必要です。たんぽぽハウスでは住民を「応援団」と位置づけ、日常から地域住民と共に事業を進めていました。

発災前（日常）

住民との対話からはじまった施設は、地域に開かれた場づくりが意識されていました。カレーやドレッシングなど自主製品の製造販売、農作業、弁当･食堂などの活動を通じて、障害のある人の「集いの場、仕事の場、地域社会との出合いの場」を提供してきました。

熊本地震（本震）当日

施設２軒のうち１軒は半壊、もう１軒は配管が壊れました。震災前から災害訓練を実施し、指定されていた避難場所に避難しました。利用者がどの部屋で寝ているかを把握していたので、救出作業もスムーズでした。利用者の安否も確認できました。その後、自宅や避難所にいる利用者の支援を続けました。

ポイント２　得意なことをやる

自分たちの特長を生かして、地域の支援活動も行いました。福祉事業所だからこそできる地域支援の好例のひとつです。

３日目～

たんぽぽハウスの片づけを行いつつ、障害者などの受け入れを開始。また、地域の支援活動も開始しました。

主な支援内容

①炊き出し：発災後、約１ヶ月間毎日約200～300食を朝昼夜と避難所や近所の方に配りました。
②物資の配達：全国各地からたんぽぽハウスに届いた物資を調査を兼ねて各家庭に配りました。
③避難所で生活できない方の支援：大型車の手配、テント貸出し、ペットの餌などを配達しました。
④福祉避難所の運営：障害者などの避難所になりました。
⑤入浴支援：自衛隊のお風呂で在宅の障害のある人への入浴支援をしました。

３週間後～

作業所を再開。送迎ができないため、集まった利用者は通常の半分程度でした。
また、食堂の営業も再開し、地域の人やボランティアさんが大勢、来てくれました。

ポイント３　支援を受けることも大切

多くのボランティアの力を借りて、早めに事業を再開できました。再開後も多くの人がボランティアや客として支えてくれました。

たんぽぽハウスに集い、たんぽぽハウスを支えたボランティア

地震の直後から、たんぽぽハウスには多くのボランティアが集まってきました。施設内の片づけも、職員が炊き出しに出かけているうちに、ボランティアがほとんどやってくれました。

たんぽぽハウス施設長の上村さんは「数えていないので正確な人数はわかりません」と前置きしたうえで、震災から２週間は１日30人以上、3ケ月程度は１日平均30人、1年で合計3,000人を超えるボランティアがたんぽぽを通じて活動を担ったと言います。村の人口の半数近い人が、ボランティア活動に参加したことになります。

「ボランティアには、次はこれをしてもらおう」とニーズのアンテナを常に張っています。ボランティアを受け入れるために普段から実践していることが、災害時にも生きました。

炊き出しの様子

ボランティアの受け入れ方針は「来る者拒まず」

- 災害ボランティアセンターの定員を超えてしまい活動できなかったボランティアを受け入れ。
- とび職や大工など専門性のあるボランティアを「テクニカルボランティア」と称して、屋根の修理などセンターで対応が難しかったケースを手伝ってもらう。
- 全国から届いた救援物資を各家庭に届ける活動は、職員とペアでボランティアが担う。
- 体を動かしたいボランティアには土のうを作ってもらう。
- 利用者と活動したい人には献立を一緒に考えてもらう。

団体からのメッセージ

たんぽぽハウス施設長　上村加代子さん

緊急時になってから受け入れるのでは間に合いません。知らない人がいる環境に利用者が慣れておくことが大切です。普段から間口を広くし、利用者もボランティアも職員も、ごちゃ混ぜが理想の状態。手伝いたいという人を断る理由なんてありません。

※本事例は、『ウォロ』No.522（2018年12月号･2019年１月号，大阪ボランティア協会）の特集の一部から再編集しました。

専門家でなくても、お願いできることイロイロ

災害が発生して猫の手も借りたい状況では、周りの人に「手伝って！」とお願いすることが必要です。その際、障害や難病に対するケアの専門家でなければお願いできないこともありますが、専門家でない人にもお願いできることはイロイロあります。

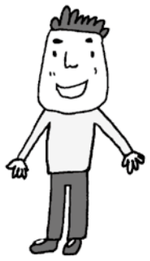
聴く

職員が必死に動き回っていると、障害や難病の当事者は気軽に話すことができません。でもボランティアなら、じっくり気持ちに寄り添ってもらうことができるかもしれません。また普段付き合いがない人だからこそ本音を話せたり、必ずしも問題が解決しなくても、聴いてもらえるだけで被災者やスタッフの心が休まったりすることがあります。

◎ マッサージができる、似顔絵が描けるなど、ちょっとした特技がある人は、それをきっかけに話をする時間を作る。
◎ 支援物資として届くお菓子や日用品を配りながら、おしゃべりを楽しむ。
◎ 職員や専門家といっしょに話を聴き、記録を作成する。
◎ 職員など支援者も被災している場合が多い。支援者の苦労や家庭の話も聴く。

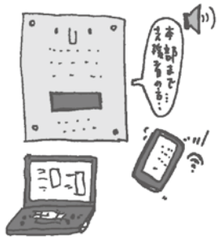
自分の意見を強く主張しているような人は、別の本心や困りごとを抱えている場合も多いです。秘密を守ることが原則ですが、必要なことは本人同意のうえで伝えてもらうようにお願いしましょう。専門家でない人だからこそ、ニーズをうまく拾ってもらえる場合も多いです。

場を作る



◎ 掃除や整理整頓をして、綺麗で過ごしやすい場を作る。
◎ 子どもを預かる場を作る。そこで職員の子どもも預かれば、職員は仕事に集中することができる。
◎ 障害や難病がある人にも、役割をもってその場に貢献してもらう。
◎ 一人で過ごせる、体を動かせる、大きな声が出せるなど、特別な空間を作る。
◎ お茶やお菓子をつまみながら、のんびり話せるサロンを運営する。
◎ 段ボールで間仕切りを作ったりして、過ごしやすいスペースを作る。
◎ 炊き出しにはいろいろな作業があり障害者や子どもも参加しやすい。

情報の収集・発信・記録



◎ 紙とペンでアナウンスを明るく、わかりやすく書いて掲示する。
◎ インターネットや掲示などで提供されている情報が、視覚・聴覚障害などでキャッチできない場合は、適切な方法で本人に伝える。
◎ 近所の様子、関係者の安否、開いているお店など、インターネットではわからない情報を収集し、当事者や支援者に伝える。
◎ 障害者や難病者がいることを周囲に知らせ、配慮や理解を促す。
◎ 困っていることや必要な物などを発信し、支援を呼び込む。
◎ 当事者や支援者の人数や状況などを記録する。写真を撮っておく。

物の提供

障害者や難病者は、一般的な支援物資とは異なる物が必要になる場合も多いです。そんな時、福祉や医療分野以外の人にお願いすると、うまく探してもらえることがあります。また、大工仕事が得意な人がいれば、必要な物を作ってもらえるかもしれません。

◎ 障害などの状態にあったトイレ。
◎ 即席で手すりなど必要なものを作ってもらう。
◎ キャンピングカー。
◎ 介助者も入れる大型テントトイレ。
◎ 調理器具。
◎ 段ボールなど間仕切りや囲いの材料。
◎ タバコと火。
◎ 車と運転してくれる人。
◎ 減塩食、アレルギーや苦手な食べ物が多い人にも配慮した食事を作るための、多様な食材。

コラム　窓口を開いたことで、埋もれていた生活課題が見えてきた

2018（平成30）年9月4日に台風21号が通過した翌日から、ボランティアセンターの電話が鳴り始めました。その中には「屋根瓦が破損して雨漏りしている。ブルーシートをかけたいが、高齢者や障害者の世帯で自分たちでは作業ができない」という相談が多くありました。

本来、屋根の修理や高所作業は、専門業者の領域です。また、技術系ボランティア団体とのつながりもない中で、依頼を受けるかどうか迷いましたが、尊敬する他市の先輩社協マンの一言で対応を決断しました。

「屋根の上にニーズがある人は　屋根下にも必ずニーズがある！」

屋根上応急サポートプロジェクトの実行にあたっては、技術を持つボランティア団体に多大なるご協力をいただきました。それに加えて、地元でも屋根に登れる人を増やすために、広くボランティアを募集し、屋根に登れない人でも、土のう袋に砂を詰めたり、ブルーシートを切ったりするなど、できることをお願いしました。

プロジェクトを実行したことで、ご本人もどこに相談したらいいかわからないまま埋もれていた生活課題をキャッチすることもできました。ブルーシート張りのニーズ対応については様々な課題もあり、今後議論が必要だと思いますが、窓口を開き、困りごとに寄り添うことで、キャッチできた屋根下の「暮らしのＳＯＳ」があったのではないかと考えています。

社会福祉法人　岸和田市社会福祉協議会　青山織衣さん

災害時につながっておきたい人々

災害時の訓練をするとき、職員やスタッフが全員そろっている前提でやっていませんか？

災害が起こると、交通機関が麻痺したり、自分の家族を守るのに必死だったりして、出勤できない人が多いです。頼みの綱の行政機関自体も被災し、十分な支援は期待できません。一方、障害者や難病者の支援団体は、普段の利用者でない人からも頼られます。

こうして態勢が弱まる中で増大するニーズに対応するためには、支援団体も周りに頼ることが必要です。被災地域外の障害・難病支援団体や近所の人など、視野を広げれば頼れる人はたくさんいます。また、災害支援団体や企業など異質な人々とつながっていると、自分たちにない経験や道具を持っていて助けられることもあります。

コラム
「SOS ファイル」大切なわが子への遺言書として

大きな災害が起きて、両親が亡くなっても、障害のある大切なわが子には健やかに生き延びてほしい。SOS ファイルは障害のある子を持つ親から子への遺言書でもあります。大好きなお父さん、お母さんと会えなくて、ただでさえ辛い時に、わが子を託す支援者に対し障害特性や暮らし方の癖を少しでも理解してもらい、より適切な支援につなげたいとの親の思いです。

もともと、2005 年に福岡で起きた福岡県西方沖地震の後に、福岡市知的障害者特別支援学校保護者会連合会で作成され、福岡市立福岡中央特別支援学校のホームページ上に掲載されていたものを、大阪府立吹田支援学校の在校生と卒業生の保護者とが使用しやすいように作り直し、現在では本来の趣旨通りに誰でも使えるように同校のホームページにもエクセルデータで掲載されています（https://www.osaka-c.ed.jp/suita-y/sosfile.html）。

SOS ファイルの作成に取り組むことで、わが子の障害特性が客観的に評価、整理されるので、家族や PTA 仲間同士で防災減災の知恵を育む効果もあり、特別支援学校の PTA を中心に取り組む学校が増えています。災害ごときで愛しいわが子を不幸にしたくない。SOS ファイルは障害児を育てる親の祈りのかたちなのです。

大阪府立支援学校 PTA 協議会
OB 会防災担当　湯井恵美子さん

カードの内容

あてはまる所にチェックしています	□ 食物アレルギーがあります
□（　　）があると落ち着きます	□ 医療的な配慮がいります
□ 静かな場所が落ち着きます	□ その他
□ 暗いところは苦手です	
□ 一人でいることが不安です	名前 ＿＿＿＿＿＿

周りの人の力を借りる

災害が起きると周りの人の力を借りることが必要です。忙しいときだからこそ、ポイントをふまえてコーディネートすることで、負担を減らすことにつながります。

①困りごと、希望を聴く

障害者や難病者、その家族や職員に、困りごとや希望することを聴きます。その際、相手を「支援される人」と決めつけず、まずは被災したことに共感し、自然な会話の中から聴いたり感じたりできるといいですね。眠れているか、食欲はあるか、疲れが溜まっていないかなど具体的な問いかけをしていきましょう。

想定される希望やニーズの例

- 視覚障害者に口頭で情報を伝えるなど、障害特性に合わせた情報案内がほしい。
- こだわりの物を自宅から入手したい。
- 自分が邪魔になっていないか不安。
- 必要物品などの情報発信と問い合わせ対応してほしい。
- 施設外の情報を知りたい（コンビニ開いてる？炊き出しやってる？）。

②役割を作る、活動内容や関わり方を考える

希望を叶えるためのボランティアプログラムを考えます。それぞれの特色を生かし、障害者や難病者にも役割を担ってもらいましょう。もちろん、障害者や難病者のケアにあたるのであれば、最低限の注意事項や苦手なこと、アレルギーなどに注意することも必要です。同性や同世代が対応するべきことも多いでしょう。またケアする人同士の引継ぎも考え、継続性を確保したいところです。

ボランティアプログラムの例

- 壁新聞作成や筆談などでの通訳介助。
- 見守りや見回り。
- 外出支援、車の運転、買い物代行。
- 傾聴、話し相手。
- カフェ、足湯、マッサージなどの余暇支援。
- 掃除やお花を飾るなどの環境整備。
- 物資の受け取り、管理。
- 文字や写真で記録する。

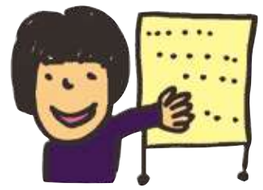
③参加を呼びかける

たいていの人は、自分が何かの役に立ちたいと思っています。でも経験がないとかえって迷惑になると思っていたりして、自ら手を出しづらいものです。困っていることをアピールし、手伝ってもらうようお願いしてみましょう。支え合う関係が災害時にも大切です。

呼びかける対象の例

- 障害者や難病者、その家族。
- 近所の人。
- 普段から関わりのあるボランティア。
- 災害支援団体。
- 職員や利用者の知人。
- 災害ボランティアセンターや被災地障害者センターに相談する。

④受付・オリエンテーション



受付ではその人がどんな人か、どんな気持ちでいるのかをよく聴きましょう。そして、なぜそれをしてほしいのか、これまでどうしてきたのかなど、お願いの背景や目指しているものもいっしょに伝えましょう。そうすれば、考えて行動してもらえるようになります。オリエンテーション資料や記録シートなども作成すれば、説明の手間も減って引き継ぎもスムーズになります。

聴くことの例

- 活動のきっかけや動機。
- 障害者や難病者との関わり経験。
- 活動できる期間。
- 得意なこと（力仕事、事務作業、車の運転、音楽演奏、絵を描くなど）。

伝えることの例

- 来てくれてありがとうの気持ち。
- 障害者・難病者や職員の気持ち、心の状態。
- ボランティアの心構え（あいさつ、守秘義務、ルールを守るなど）。
- 被災者のためにもボランティアのためにも、やりすぎないことが大切。

⑤様子を見る

ボランティアが利用者の希望を聴かずに善意を押し付けてしまう可能性もあれば、逆に、予定と違う活動を頼まれてボランティアが困惑してしまう可能性もあります。善意の活動だけに断るのは難しいので、介入が必要なこともあります。その場で起きていることに加えて、心の中を感じとり、気持ちいい活動になるよう調整しましょう。

確認する内容の例

- 受け入れる側が自分の状況やお願いをうまく説明できているか。
- ボランティアの希望や適性と、活動内容が合っているか。
- 周囲の人との人間関係、コミュニケーションがうまくいっているか。
- ボランティアが休憩できているか。

⑥次の生かし方、改善点を考える

活動してくれた人や受け入れた障害者・難病者などに、感想や改善案などを聴き、次の活動に生かしましょう。トラブルが起きた場合は、できるだけその場で解消することをめざし、それが難しくても、翌日の申し送り事項として備忘録を残すなど、確実に対応できるようにします。

手伝ってくれた人に聴くことの例

- どんな活動をしたのか。
- 活動して楽しかったことや嬉しかったこと。
- 困ったこと、改善したほうがよいこと。

受け入れ側に聴くことの例

- どんな活動をしてもらって、どんな様子だったのか。
- 受け入れてよかったことや嬉しかったこと。
- 困ったこと、改善したほうがよいこと。

災害時に障害者や難病者を支援したり、支援を受けたりするためのポイントは、「日常のつながり作り」にあります。そしてつながりを作るためには、日常からいろんな人といっしょに協働することが効果的です。災害と関係なくても、お祭りでも餅つきでも畑仕事でもいいのです。
ここでは、災害に関係する取り組み例を２つご紹介します。

事例１　双方向なつながり作りと＜他者目線＞からまちを見直す　～障害者の地域生活と災害避難

特定非営利活動法人　日常生活支援ネットワーク
コーディネーター　椎名保友

わたしは東日本大震災発生時、被災地へ直接行っての救援活動だけではなく、遠く離れた大阪でいろんな方々と一緒に思いを馳せながら、「災害と障害者」としてできることは何かと取り組んできました。

その一つが「東北⇔関西ポジティブ生活文化交流祭」。被災された障害者を大阪に招き、関西の障害者団体や現地での活動に関わった方と被災地には行けないが何かできないだろうかという思いのある方々が年に一回集い、近況を報告しあっています。集まった数千人のみなさんが有機的につながり、いざというときに協力し合えるためにこの＜お祭り＞を 2011 年より毎年開催してきました。

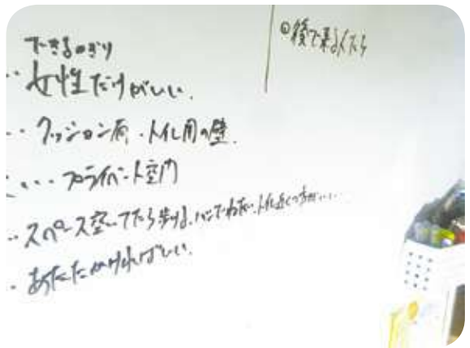
日常からのつながりとして、発災直後から定期的に集まっての街頭募金活動。ただのお金のやりとりだけではなく、東北支援をまだ続けていることや全国各地での災害と障害者の現状を伝えることを大切にしています。まだまだ東日本大震災や被災障害者を気にかけている人たちの思いと向き合う機会にもなっています。大災害が多発した 2018 年夏には全国のみなさんに協力を求め、20 か所の地域で「同刻いっせい被災障害者救援」街頭募金を開催しました。

いろんな障害当事者や子どもたちと知らないまちへ出向き、その地元の人たちと＜いま災害が起こったら、みんなで助かることができるか？＞を考える「まちなか被災シミュレーション」。「私が」ではなく、「車いす利用の○○さん大丈夫かな？」という目線でまちを見直す。いろんな人同士がお互い心配りしあう関係性をつくるためのまちあるき避難行動イベントも行っています。

障害者と周辺の人たちが集える。その周辺の人たちがいざというときに、いろんな人たちと協力し合えるためのつながり作りに日常から取り組んでいます。

事例２　福祉事業所で一泊災害訓練

社会福祉法人　大阪ボランティア協会



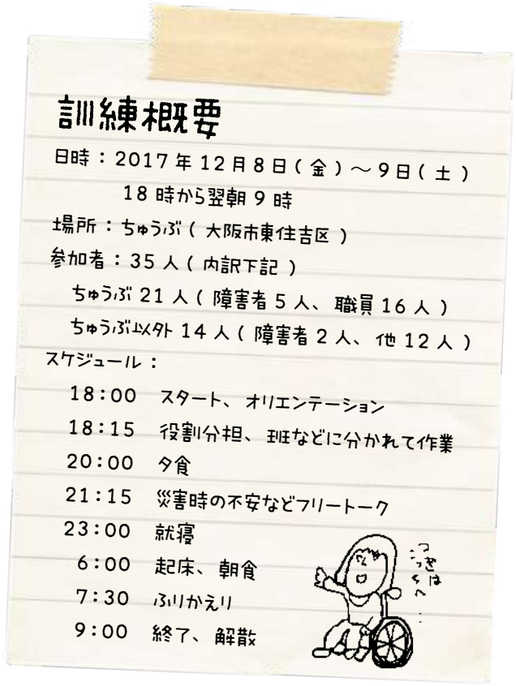
災害時、拠点のある福祉事業所には、通常の施設利用者に加えて在宅サービス利用者やその他多くの障害者や難病者が集まってくることが想定されます。職員も被災して出勤できる人は限られる中、その場に集った人が助け合い、ボランティアなどの外部支援もうまく受ける必要があります。そうした状況を模擬体験しながら、福祉事業所で一泊体験をしてみました。

当日の主な条件としては、震度６強の上町断層帯地震発生から７日後を想定しました。訓練中は、電気、水道、ガスは使えないこととしましたが、トイレの電気と水道、およびトイレ移動のためのエレベーターは使えるようにしました。暖房器具として石油ストーブが２つあり、寝具はベッドが２つダンボールベッドが２つ（要組立）あるが、全員分はない状況で、誰がベッドを使うかも参加者で話し合ってもらいました。

当日リーダーは特定非営利活動法人ちゅうぶの職員２人と外部ボランティア１人で、事前の打合せはしませんでした。リーダー役の職員は管理職ではなく、あえて若手職員にお願いしました。実際の災害において、管理職は動き回ってどこにいるかもわからないことが多いためです。

リーダーはボランティア役に対して、初めに「介護経験の有無」と「特技」について聞き取りを行いました。ケア経験のあるボランティア役は、障害者の介助・見守りを行いました。ケア経験のないボランティア役は、炊き出し班にて調理を行うことや、ダンボールベッドの組立・解体などの避難所運営に関わる活動を行いました。ケアの専門性を持たないボランティアが「炊き出し」、「避難所運営」などの様々な活動を担えることが具体的に明らかとなったことが、成果の１つです。

しかし、リーダーが直接動いてしまって、ボランティア役が手持ち無沙汰になるシーンもありました。またボランティアから提案するといったような主体性を発揮する様子もあまり見受けられませんでした。全体的に参加者同士が遠慮がちなコミュニケーションになったことが、見えてきた問題です。出会って１日も経っていない中では無理もないことですが、迅速に支え合える関係を構築するコーディネーションが課題だと感じました。



訓練概要

日時：2017 年 12 月８日（金）～９日（土）
　　18 時から翌朝９時
場所：ちゅうぶ（大阪市東住吉区）
参加者：35 人（内訳下記）
　ちゅうぶ 21 人（障害者５人、職員 16 人）
　ちゅうぶ以外 14 人（障害者２人、他 12 人）
スケジュール：
　18:00　スタート、オリエンテーション
　18:15　役割分担、班などに分かれて作業
　20:00　夕食
　21:15　災害時の不安などフリートーク
　23:00　就寝
　6:00　起床、朝食
　7:30　ふりかえり
　9:00　終了、解散

災害時に障害者・難病患者さんを支える３つの力

多くの災害現場で、障害者・難病患者さんを支えたのは３つの力でした。１つ目は、日常の支援者である「プロの力」です。特に介助の必要な方には不可欠な支援です。２つ目は､「大勢のボランティア」です。おしゃべり、遊び相手、片づけなどプロでなくてもできることがたくさん、たくさんあります。３つ目は、「組織、地域の力」です。障害者・難病患者さんを支え続け、支援者とつなぎ続けられる組織、地域のまとめ役がとても重要です。

３つの力は災害時に急に作ることはできません。日常の取り組みが大切です。このパンフレットをご活用いただき、日常も災害時もよい支え合いにつなげていただければ幸いです。

跡見学園女子大学、一般社団法人福祉防災コミュニティ協会　鍵屋 一

ヒアリング協力
青山 織衣　（社会福祉法人岸和田市社会福祉協議会）
上村 加代子（特定非営利活動法人にしはらたんぽぽハウス）

協力者：災害時のスペシャルニーズ支援事業　障害者・難病者支援研究会
萬代 由希子（関西福祉大学）【研究会座長】
青木 淳　（社会福祉法人大阪府社会福祉協議会）
石田 義典　（特定非営利活動法人ちゅうぶ）
岩本 恭典　（特定非営利活動法人み・らいず２）
木村 弘之　（日本赤十字社大阪府支部）
椎名 保友　（特定非営利活動法人日常生活支援ネットワークパーティ・パーティ）
髙間 晶子　（日本赤十字社大阪府支部）
中川 由希子（視覚障害者支援の会クローバー）
中村 夏美　（大阪府生活協同組合連合会）
浜辺 隆之　（社会福祉法人大阪市社会福祉協議会）
枡谷 礼路　（特定非営利活動法人み・らいず２）
水上 さゆり（株式会社徳洋福祉会）
若松 周平　（特定非営利活動法人み・らいず２）
渡辺 みちよ（コーポラティーバまいど）

監修
鍵屋 一　（跡見学園女子大学、一般社団法人福祉防災コミュニティ協会）

事務局
社会福祉法人大阪ボランティア協会
梅原 聡、岡村 こず恵、小林 政夫、永井 美佳、湯井 恵美子、萬浪 侑子、森本 聡

2019 年 3 月 31 日　発行
発行：社会福祉法人　大阪ボランティア協会
〒 540-0012　大阪市中央区谷町 2 丁目 2-20 2F　市民活動スクエア「ＣＡＮＶＡＳ谷町」
TEL　06-6809-4901　　FAX　06-6809-4902
Email　office@osakavol.org　　URL　http://www.osakavol.org/

印刷・製本：企業組合　ねっこの輪　　イラスト：鈴本百合香・永田千砂
デザイン・編集協力：ちまちま工房

※本ハンドブックは、平成 30 年度大阪府福祉基金からの助成を受けて作成しました。